



Title	日本語数量詞の多層的構造と機能に関する総合的研究
Author(s)	張, 琴琴
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16969号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16969
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99813
Type	doctoral thesis
File Information	Qinqin_Zhang_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 張 琴琴

学位論文題名

日本語数量詞の多層的構造と機能に関する総合的研究

本論文は、現代日本語における数量詞を、形態論・語彙論的分析、意味論・統語論的分析、語用論的分析の三側面から総合的に考察し、その多層的構造と機能を体系的に明らかにすることを目的としたものである。従来、日本語数量詞研究は、助数詞の分類、数量詞遊離構文、個別現象の記述など、限定的な視点にとどまることが多かった。本論文は、数量詞を「数・量の表現」という表層的機能にとどめず、談話における指示性、文構造との相互作用、社会語用論的役割に至るまで幅広く検討し、日本語における数量詞体系の全体像を提示する点に特徴がある。

本論文は、全体を5部構成として展開している。第Ⅰ部は「第1章」からなり、第Ⅱ部は第2章から第4章までの3章で構成される。第Ⅲ部は第5章から第9章までの5章を収め、第Ⅳ部は「第10章」と「第11章」の2章からなる。最後に、第Ⅴ部において第12章を配し、全体の締めくくりとした。以下に各章の内容について詳しく述べる。

第1章では、現代日本語における数量詞を研究対象とし、その形態・語彙・統語・意味・語用にまたがる多面的特性を包括的に明らかにすることを目的として示した。数量詞は「1冊」、「3人」といった典型的形式に加え、「たくさん」、「20～30人」、「お二人」のような非典型的な表現も含まれ、従来の研究では十分に分析されてこなかった領域が存在することを指摘した。

第2章では、従来の数量詞研究において用語・分類体系が統一されてこなかった点を踏まえ、形式的多様性を包括的に捉えるための新たな定義基準を提示した。とりわけ「おおよそ2時間ぐらい」のような未検討形式を射程に含め、形態的・意味的観点から数量詞を再体系化することで、従来研究の空白部を理論的に補完した。さらに、新たに「準特定数量詞」というカテゴリーを設定し、「数人」、「約10人」等を統合的に位置づける枠組みを構築した点は、本研究の重要な成果である。AQ（副詞＋数量詞）型・QN（数量詞＋名詞）型・QP（数量詞＋副助詞）型・AQN（副詞＋数量詞＋名詞）型・AQP（副詞＋数量詞＋副助詞）型・AQNP（副詞＋数量詞＋名詞＋副助詞）型・QNP（数量詞＋名詞＋副助詞）型・〔「数」＋助数詞〕型・〔いく＋つ・何＋助数詞＋か〕型・〔概数数量詞〕型の10種類の形式分類を提

示したことにより、日本語数量詞の全体像を明確化し、後続章の分析に必要な基盤を確立した。

第3章では、特定数量詞に用いられる数詞の語種混用を精査し、現代日本語における漢語系数詞優勢という分布傾向を形態論的観点から実証的に示した。分析の結果、和語系数詞（ひと、ふた、よん、なな）は一部の数字で主流である一方、現代日本語では漢語系数詞（さん、ご、ろく、はち、きゅう、じゅう）が全体的に優勢であることが確認された。また、有標性／無標性の視点を導入することで、漢語系数詞が数詞体系においてより強固な基盤を有する点が明らかとなった。以上の検討は、数詞体系の内部構造を理論的に明確化し、数詞選択を規定する原理を把握するうえで重要な基盤を提供するものである。

第4章では、日本語における概数数量詞を対象とし、それを「隣接型（2～3人）」と「非隣接型（2～4人）」の2種類に分類したうえで、両者の音韻形態および有標性の相違を体系的に示した。アクセント辞典や日本語教材を資料として調査した結果、隣接型には「 $\emptyset$ 」、「から」、「か」、「ないし」といった複数の音韻形態が確認され、これらは文体差や形態的有標性の違いを反映していることが明らかとなった。一方で、非隣接型では「から」を介する表現のみが成立し、音韻的バリエーションは限定的であることが判明した。さらに、隣接型が有標、非隣接型が無標であるという結論は、概数表現の使用難易度や習得の差異を説明する新たな説明原理を提供した。

第5章では、加藤（1997、2003）の用語を援用し、3種類の数量詞（特定数量詞・不特定数量詞・準特定数量詞）が連体数量詞文および連用数量詞文においてどのような意味用法を示すかを考察した。その結果、存在数量を表す場合には、3種類の数量詞はいずれも同一の意味解釈に収束することが明らかとなった。本章の結論自体は、加藤（2003）の指摘を大きく超えるものではないが、これまで取り上げられることのなかった不特定数量詞と準特定数量詞を加え、3種類の数量詞の意味的類似性を体系的に検証した点は、従来の数量詞研究に新たな視座を提供するものである。したがって、本章の分析は、加藤（2003）が提案した概念を改めて裏づける根拠を与えると同時に、既存研究の進展に資する意義を持つと位置づけることができる。

第6章では、日本語動詞の分類を「他動性」と「数量詞付加による限界性」という2つの観点から再検討した。従来の研究においては、金田一や Vendler、工藤、三原らによる分類が提示されてきたが、それぞれの基準には不整合や曖昧さが残されていた。本章ではそれらを整理したうえで、新たに他動詞を「消滅動詞」、「作成動詞」、「所有関係変化動詞」、「対象変化動詞」、「単なる動作動詞」、「その他の動詞」に、自動詞を「出現・消滅動詞」、「動作動詞」、「移動動詞」、「その他の動

詞」に区分し、動作主体の働きかけが目的語や事象にどのような物理的・非物理的变化をもたらすのかを明確にした。また、数量詞の付加が動詞の開始限界や終了限界に直接関与し、本来は非限界であった動詞を限界動詞へと転換させるなど、動詞のアスペクト解釈を変化させる現象が存在することを指摘した。その結果、動詞の限界性解釈は最大 9 種類に整理可能であることを示し、数量詞と動詞の相互作用を精緻に捉える枠組みを提示した。

第 7 章では、日本語における数量詞句がアスペクト解釈に及ぼす影響について詳細に分析した。従来の研究に基づき、「ル」、「タ」、「テイル」といった文法的アスペクトの対立と、数量詞の位置（連体数量詞文と連用数量詞文）が解釈に差異を生むことを前提に議論を進めた。分析対象は、消費動詞（「食べる」、「飲む」）と作成動詞（「書く」、「作る」）であり、自動詞や存在動詞、移動動詞は対象外とした。考察の結果、連体数量詞文は既定的単位を表し、動作の終了とともに完了解釈に移行する一方で、数量の追加や累積は不可能であることが明らかとなった。これに対し、連用数量詞文は未定的単位を表し、数量詞の追加が可能であり、動作量の累積が生じ、アスペクト解釈が動作の進行に応じて随時変化するという特徴を持つことが判明した。また、両文が対応しないケースも存在し、属性数量詞の場合はアスペクト解釈に影響を与えず、動作量を表す数量詞の場合は連用数量詞文のみ成立することが確認された。この分析を通じて、数量詞の有無および種類が日本語のアスペクト解釈に重要な役割を果たすことを示した。さらに、これらの知見は他動詞に限らず、自動詞を含むより広範な動詞にも適用可能であることが示唆され、今後の研究課題として数量詞と動詞の相互作用を体系的に解明することが挙げられる。

第 8 章では、数量詞の指示性を統語的観点から検討し、数量詞の指示性を「単なる数量提示ではなく、話者と聞き手が共有する文脈情報に基づいて特定対象を区別・参照する機能」と定義し、指示詞を付加して自然な文が成立する場合を指示性の判定基準として提示した。連体数量詞は既定的単位として集合的に認知されやすく既知情報の指示に適しているため指示性を持ちやすいのに対し、連用数量詞は未定的・離散的に認知されるため指示性が乏しい傾向がある。さらに「この・その・あの」などの指示詞を付加することで指示性は強化され、特に連体数量詞では文脈で特定された対象を再度取り立てる効果が顕著であるが、連用数量詞は副詞的性質と統語的位置の制約から同様の付与が困難である。ただし、部分数量を表す場合には全体一部分関係に基づく限定構造により連用数量詞も指示性を獲得し得ることを示し、これは LF レベルでの意味統合によって説明可能である。

第 9 章では、数量詞の指示機能を直示用法および照応用法の観点から検討した。その分析の結果、数量詞が代名詞的に機能するのは人称代名詞の省略による場合

であり、一・二人称においては直示性を帯びる一方、三人称においては文脈依存的で照応的に用いられる傾向が強いことが明らかになった。また、裸の数量詞は直示性に乏しく、指示詞や連体修飾節と共起することで直示機能が補強されるが、共起要素を欠く場合には照応的に転換することが示された。さらに、照応用法については前方照応が中心であるが、会話においては後方照応も成立することが確認された。加えて、「2 人」のような人間を表す数量詞と、「3 つ」のような事物を表す数量詞はいずれも共通のメカニズムで指示機能を持つことが明らかとなった。以上の考察から、数量詞は単なる数量表現にとどまらず、文脈に応じて直示性や照応性を獲得する表現形式であることが示された。

第 10 章では、日本語の日常会話に広く見られる「大体 1 時間」、「約 300 人」、「30 個ぐらい」といった概数表現について、Brown&Levinson (1987) のポライトネス理論および Grice (1975) の質の格率を理論的基盤として検討し、その語用論的機能を多面的に明らかにした。まず、行為要求や行為予告といった相互行為的負担の大きい場面では、概数表現が聞き手および話し手自身のネガティブ・フェイスを維持する有効な手段として機能することを示した。すなわち、数量を意図的に曖昧化することで発話内容の拘束力を下げ、行為選択の自由度を確保する働きが体系的に観察された。また、未来の出来事の予測や過去の事実叙述においては、ポライトネスの効果は相対的に弱まるものの、話し手が断定を避け、発話責任を調整する際の方略として概数表現が利用されることを明確にした。この点は、質の格率に照らして、不確実性を伴う情報を提示する際の語用論的戦略として位置づけられる。さらに、認知処理の観点からは、概数表現が発話・理解の負担を軽減し、数値情報の想起や計算を簡略化することで、言語的経済性（発話上・認知処理上の双方）を実現していることを示した。分析結果から、日本語の概数表現は単なる数量の曖昧化にとどまらず、(1) 発話責任の調整、(2) フェイス維持の支援、(3) 認知的負担の軽減という複合的な機能を体系的に担っていることを明確にした。

第 11 章では、「お／ご＋名詞」におけるネガティブ・ポライトネスの度合いの差異に着目し、接頭辞「お」が付加された数量詞の使用動機を考察した。まず、人を表す数量詞は「～名」、「～り」、「～方」の 3 パターンが混在するが、最も普遍的なものは「～名」であり、「～り」と「～方」は限られた表現しか現れないことがわかった。また、人を表す数量詞に「お／ご」が付く例はほとんど見られず、「お＋数量詞」は主に話し手が聞き手に敬意を表すために用いられ、一種のネガティブ・ポライトネスとして機能することを明確にした。ただし、「お 1 人様」のような表現は慇懃無礼に響き、皮肉的用法も生じる。一方、物を表す数量詞においては「お」を付ける用法が主であり、美化語としての「お」は話し手自身の品

位や丁寧さを示すために用いられる。また、聞き手の所有物を高めることでポジティブ・ポライトネスの効果も生まれる。したがって、数量詞に接頭辞「お」を付ける動機は、相手への敬意を示すと同時に話し手自身の品位を表すことにあり、会話においては相手との心理的距離を縮めつつ、柔らかい印象を与える情緒的要素が作用していると考えられる。

第12章では、議論全体を振り返って論点および成果をまとめたうえで、今後の課題を記している。

本論文は、現代日本語における数量詞の研究に新たな理論的枠組みと語用論的視点を導入し、従来の研究には見られなかった多角的かつ体系的な分析を実現している。これまでの数量詞研究は数量詞遊離や助数詞の性質など個別的な論点に留まることが多かったが、本研究は形態論・語彙論、意味論・統語論、さらには語用論を統合的に扱うことで、数量詞という複合的な言語形式の全体像を明確に描き出すことが期待できる。また、数量詞の意味解釈メカニズムを精緻に検討することで、動詞の限界性やアスペクト解釈との関連を明らかにし、これまで十分に解明されてこなかった数量詞と述語との相互作用に新たな理解をもたらしている点は特筆に値する。さらに、語用論的観点から概数表現や「お／ご」を伴う数量詞の使用動機を分析したことは、数量詞の社会的機能やポライトネスとの関連性を浮き彫りにし、数量詞研究を形式的な枠組みにとどめず、人間のコミュニケーション研究へと接続させる契機を提供している。